

1 不惑会投稿「エゾシカ狩り」同行記

いただければ・・・。

元六区隊 喜田邦彦

① 「鹿狩り」に同行したわけ

倉本聰の『北の国から』は、昭和の終わりから平成の初めにかけての物語。その時期の自衛官は、「北方重視」を合言葉に「北の大地」での勤務が多かった。小生は、通算六年を道

毎年十一月十五日から翌年一月十五日までの二カ月間が、北海道における狩猟解禁時期だった。帯広狩猟同好会の人達は、精進と訓練を重ね、手ぐすね引いて待っている。

東(帯広二回)・道北(旭川)で勤務してきた。三十年も前と言えば、昭和天皇が崩御され、湾岸危機が勃発し、ソ連が崩壊した時期。冷戦が崩壊し、PKOの国際貢献や「島嶼防衛」に移る時代の転換期にあたった。

道東に生息するエゾシカは、春の融雪時期、秋の交尾期後に群れをなし、山麓に出没して食物を漁り、次の季節に備える。だから、国立公園などの保護区域でエゾシカの群れに出会う機会が多くなる。

その思い出の一つの品が「牡鹿の首・壁掛け」。帯広の狩猟会員による「鹿狩り」に同行した際、その成果を廉価で分けてもらった。

一方で、当時の雪不足に伴い「笹の葉」が雪に覆われず、エゾシカの食料となっていた。それに加え、野鳥類の保護政策から、エゾシカの増殖に拍車がかかっていた。

その結果、増えすぎたエゾシカは、生活の糧になる農作物に被害を与え、『有害鳥獣駆除』対象の指定を受けている地域も多かった。



十一月下旬の休日を控えた午後、連隊本部

本稿は、防研戦史部勤務時代、「修親」に投稿した修正版。現代は、鳥獣保護や猟銃保持の規制等の法律は変化している。時間つぶしに「北海道弁」を思い起こし、読み飛ばして

広報班長のK三尉がやってきて、「以前約束していた『鹿撃ち』の件ですが、先週解禁されました。街の連中も期待しています。明日行きますが、ご一緒しませんか？」と誘って

2

くれた。「以前の約束」とは、創立記念日のジ
ンギスカンパーティーでの出来事。

貴重品であるシカの焼肉を奪い合いながら、
広報班長の「鹿撃ち」体験談に、「嘘や法螺が
入っている？」と思った私は、酒の勢いで失
礼なことを言ってしまった。すかさずK三
尉は、「今度、是非ご一緒しましょう。本物の
鹿撃ちをご覧に入れます」と、真顔で抗議し
た件だった。

私が鹿狩りに興味を持ったのは、矢白別演
習場の行き帰り、阿寒の国道で度々見かけた
ことによるが、もう一つ理由があった。

米国に短期留学中、米国の少佐から「鹿狩
り」に誘われたが、時間の関係で実現しな
かった。その時少佐は、「狩りは実戦的訓練にと
って最適」と強調していた。

「実戦ができない代わり、疑似体験として
の狩猟はどうか？」と、それ以来、真偽
を確かめてみたいと思っていた。

② 出発時の我がチョンボと助っ人

K三尉の言う「鹿撃ち」は、街の連中(正
確には帯広狩猟同好会)との「集団狩猟―彼
らの言葉で「共猟」のこと。狩猟というから
には、獲物をしとめなければならぬが、「本

当に大丈夫かな？」との不安がよぎった。

K三尉は、「狩猟は、場所と天候と射手次
第です。相手は生き物ですから、当たり前ず
れはつきもの。覚悟はしておいてください。」

当然と言えば当然だが、彼は慌てない。

「僕にも撃たしてもらえるのか？」

「イヤ、鹿撃ちには、猟銃の『所持許可証』

狩猟を行う『狩猟免許証』、狩猟区域立ち入る

「入林許可証」の三点セットがなくては・・・」

「わかった、それじゃー見学しよう。手足纏
にならないようにするからよろしく」

法律には逆らえず、しおらしい態度で、「服装
は、迷彩服だろうか？」

「恰好より防寒第一です。山はもう雪です。

動きやすい服装なら、何でも構いません」

「何時に出発するの？」

「狩猟許可時間は危害防止のため、日の出か
ら日没までですが、日の出の頃が一番活動す
る時間です。帯広から阿寒まで二時間半。ち
よっと早いですが三時半に出発します」

「えーっ、三時半。今夜は宴会だよ!!」

文句を言えば断られるし、鹿の都合に合わせ
るべきだと考えなおした。

「わかった。『共猟』する皆さんの計画に従い
ます。よろしく願います」

3

更にK三尉は、「鹿撃ち前夜は、本当は精進潔斎が基本です・・・今晚は、あまり遅くなりませんよう。明日はきついですから酒量も控えめに」とありがたい忠告を頂いた。

翌朝三時半過ぎ、玄関のブザー音に「オッ、シマッタ」と跳び起き、大急ぎでGパン、ヤッケ、長靴スタイルで玄関へ。

深夜の雪はみぞれに代わり、気温も零度くらいまで上昇し、暖かく感じられた。

「イヤー、寝過ぎしたよ。精進潔斎どころでない。すみません。申し訳ない」と照れ隠し。

K三尉と、同行するT曹長にも挨拶した。

だが、なんとなく彼らの様子がおかしい。

「どうかしたの？」

K三尉が、「隊長を待ってる間、連れていく予定のT曹長の猟犬が逃げました。行方不明です」「早朝ですから大声で呼べません・・・。どうしますか？」。T曹長の困った様子。

「猟犬探しか、日の出時間か」の決断を迫られたK三尉、「同好会メンバーも待っていますから、このまま出かけましょう。仕方ないですね」と決心した。

T曹長の猟犬は、零下三十度の厳冬にも平気で眠るアイヌ犬の雑種で、雪の訪れに血が騒いだのか、寝坊して遅れた者を許さなかつ

たのか、単独行動に及んだのである。

「出足不調・・・。獲物がとれなかったら私のせいにされるなあー。申し訳ない・・・」

K三尉がとりなして、「隊長、大丈夫です。射撃の名手T曹長を連れてきましたから。彼は昔、中央射撃大会にも出場した腕前です。鹿撃ち歴十一年。二百頭以上とめています」

野球で言えば、大リーグ級の助っ人を準備してくれたわけだ。しかし部隊における演習時のT曹長は、「ずば抜けている」印象はあまりなく、温厚な小隊長として記憶していた。

③ 「鹿狩り」の愉快な仲間たち

T曹長の大型ランドクルーザーに乗せてもらい、帯広郊外に出た頃から、同好会メンバーとトランシーバーによる交信が始まった。

「みんな揃ったんかア」とリーダーAさんの質問。「うーん、こっちは大丈夫」とT曹長。

「隊長さんも一緒かア」

「一緒だ。犬に逃げられたワ」

「えーッ・・・そりゃワヤダワー」

「猟犬なしかア・・・まずいんでないかア？」

「仕方ねえべえー。今日は実力で勝負だ」

「時間ないぞ・今日はどっちさ行く？」

「みぞれだア。阿寒にしヨ。車も入るべエ」

「大丈夫かい？ 先週行つたの誰だ？」

「〇〇が、足寄で二頭とつたそうだ」

「ほウ……。どこでエ？」

「まあちよつと言うわけいかなア」

「場所隠してどうなる？ 茸採りと違うぞ、

鹿は動くもんなア。はんかくさい……」

「Cちゃんは、今シーズン初めてかア？」

「うーん、ゆんべ興奮して眠れんかった」

同好会メンバーは八人。二十代後半から三

十台にかけての野郎たちで、屈託がない。「帯

広狩猟同好会チームA・代表の肩書を持つA

さんは、建設関係の仕事とか。冬が来ると本

業そっちのけ、周囲の誰も彼の本業は狩猟と

思うほどの「狩猟キチ」だそうだ。

同好会メンバーは、揃いの派手なユニフォ

ームを着用している。「まず形だわ、なんつう

ても……」(笑い声で聴きとれない)

しかし格好はピシッと決まっていた。

林道をぶっ飛ばす。トランシーバーの主役も

Aさんである。

「曹長さん、ここからそろそろよろか」

「この雪なら、相当奥まで行けるなア」

「ウインチあるから、脱輪しても大丈夫。二

台で引っ張れば、どうにでもなるワ」

「天気の見通しは？」

「前線の通過で回復ベース。気温は下がる」

「わかった。とりあえずこの道を流して杉野

沢まで行こうか」T曹長が決断を下した。

「よっしゃ。曹長さん、先頭頼むワ・俺の車

は二番目で右。Bちゃんは三番目で左を頼む。

怪しいの見つけたら教えろッ」

T曹長はケースからレミントンのライフル

を出し、照準眼鏡を取り付け、ウエストバッ

クの実弾を確認し、準備態勢に入った。

「K三尉は準備しないの？」と私が質問。

「今日は、隊長の説明役に徹しますから……」

「いやー私ならいいよ。是非キミの腕を拝見

させてもらいたいのだが……」

T曹長がすかさず、「K三尉は狩猟歴六年、散

弾銃の免許しかありません。ライフルの免許

は十年以上の経験が必要なんです」

「自衛隊のキャリアは考慮されないの？」

「聞いたことはありません。同好会メンバー

④ 流行は車両によるハンティング？

車が国道除雪道を過ぎ、枝道の未徐雪道に

入ると、そこはもう狩猟区域だった。日の出

時刻を既に過ぎていているせいか、Aさんが使い

込んだランドクルーザーを含めて合計三台が、

道路標示もガードレールもない急勾配の雪の

5

も、今日ライフル持つてるのが三人。若い連中は散弾銃ですワ」

「どう違うの？」我ながら素人的な質問だ。

「散弾は一般的に鳥用で、射撃距離百メートル。ライフルは獣用で三百メートルです」

対象によって銃が異なるのは自衛隊も同じだが、経験年数によって銃を規制するのはどういう理由だろう。狩猟協会の「メンツ」か？鳥獣の「過保護政策」によるのか？

「その辺はどうも・・・」とK三尉。

「さっき『流す』って言ってたが、意味は？」

T曹長は片手でハンドル、片手で銃をすぐ取り出せる格好で、慎重に車を進め、前方の監視に余念がない。

『『流す』でなく『流し』が正解です。タクシ―の「流し」からとった狩猟方法です。後ろの車を見てください」

振り返って「ギョッ」とした。西部劇の幌馬車とインディアンの戦闘宜しく、の窓から猟銃をニュッと突き出して構えている。

「鹿撃ちってのは、車外に出て撃つんじゃないの・・・？」

「車からの射撃は禁止ですが、格好をつけているのでしょうか。散弾の者もやりますね」

「道交法・銃刀法とかの法律は大丈夫？」

「公道での射撃は禁じられていますが、許可区域ですから」とT曹長

「流しは、車と林道の発達で、最近のはやりです。昔は雪道を歩いたり、野宿しましたが、狩猟としては邪道ですね」

「手っ取り早いし、遭遇機会が多いし、雪や低温を避けられますから、人気があります」つまりこの方法は、野外訓練の「車両斥候」に似ている。

「しかし、今日の予定の『共猟』っていうのは、これじゃないよね？」

「イヤー、後で本格的にやりますよ。目的地までの行きがけの駄賃ですよ、これは」

「チーフ、車から降りて右の谷見るかい？」
「いるところに行きやーなんぼでも居るんだ。急ごう。ここの路肩やばいし・・・」

おしゃべりで時間も過ぎていくが、エゾシカとは一向に遭遇しない。しかし彼等には、プロの余裕か、焦りとか緊迫感を感じられなかった。それはまた、彼らの柔らかい方言のせいなのかもしれない。

⑤ 名人の「鹿撃ち」―見事仕留めた

みぞれは小降りになった。K三尉は「絶好のコンディションです。餌の笹が雨で雪面に

6 出ますし、薄暗いので鹿は日中も動きません」

突然T曹長が車を止めた。「いた」と叫んで飛び出した。後続の車も止まる。

同好会メンバーも腰をかがめて走る。見る間に土手に身を隠し、獲物を確認している。

私は、残された車の後部座席から身を乗り出し、「どこ？ どこ？」とK三尉にせつつく。

「牡鹿です。二時の方向、六合目、笹を食べていますね・・・。ちよっと見づらいですが」

矯正視力がコンマ八の私には、場所も様子もわからない。鹿も気になるが、射手の動きも気がかりである。

T曹長は銃を構えているが、同好会メンバーは眼鏡で獲物との距離を測っており、据銃してない。第一発見者に優先権があるのか？

T曹長の能力を信頼してか？ 理由はわからない。

時間が止まっているような緊張と静寂が続く。K三尉が小声で「ちよっと距離が遠いですネ。鹿の大きさからすると、三百五十メートル以上です。気配を感じたら逃げますから・・・。ゆっくり右に移動してますね・・・」

「パーン」T曹長が発射した。私は獲物を確認しそこない、皆が急ぎいで車に戻っていく。

T曹長が、『肋』に当たっている。右の林に

逃げ込んだが、遠くには行けないはずだ」

「隊長さん、イヤーたまげたゾ。最初の一発で仕留めるもんなア」Aさんが感心する。

「ぼつちりだ。したけど探すの大変だもんなア。谷越えだワ」B君が余計な心配をする。

「Dちゃん、ここからトランシーバーで誘導頼むワ。隊長さん、どうする？ ここで待つかい？ 探しに行くかい？」

成果なら、一刻も早く対面したい。「行くよ、行くよ!!」「じゃ、三組に分かれ、右回りの

組、中直進の組、左回りのり組。隊長さんの組は中直進。猟犬がないので、隊長さんは

その分も頑張って・・・」

いやはや、朝寝坊したツケの支払いだ。搜索を始めたが、「どうして他の者が撃たなかったのか」との疑問が頭から離れない。

K三尉が、「ライフルの者は、ちよっと距離が遠いと見たのでしよう・・・。普段は、一弾目

が外れた時に備え、第二・第三弾を準備しますが、名手のT曹長に任せたのです」と解説。

「集団狩猟、「マタギ」の仁義かな？」と私が言うと、「別に決まりはありませんね」

とT曹長が答えた。

「鹿の急所は、正面射の場合は首・鳩尾、横向きの場合は肋三枚の心臓、背後の場合は首・

7

脊椎です。下手に当たってもピョンピョン跳ねて逃げてしまいますから・・・」

K三尉が引き継いで、鹿は一秒間でふた跳び、十〜十二跳びます。射距離三百メートルの場合、跳んでいる鹿のリードは二〜三メートルになりますネ！」

「ウーン」とうなつてしまった。生きた獲物の部位を狙う射撃と、訓練で行う固定射撃の練度の差をマザマザと見せつけられた。

「鹿撃ち」は、獲物の発見／雄の識別／距離の判定／目標部位の決定／リードの設定／射撃時期の判定／獲物の行動予測、との過程を一瞬にして行う。いわば人間センサーとコンピューターであり、狩猟にハイテク装備を駆使したとしても、最後はやはり人間の腕・技量・判断力・勘がものをいう。

誘導員のトランシーバー指示に従ったが、雪に足をとられて三十分以上もかかった。それでも、獲物はなかなか見当たらない。

「先ず血痕を探してください」とK三尉。程なくトランシーバーが、「オーツ、いたいた、でかいワ・・・。沢から四合目くらいかなア」Aさんがすかさず「案内を出しとけっついても言うとするのに・・・コノー」

「リョーカイツ。Fちゃんを遣るから」

いよいよ撃ち取ったエゾシカとの対面だ。手を振っている同好会メンバーに向かい、自然に足が速くなっていた。

⑥ 狩猟の儀礼—アイヌの伝統

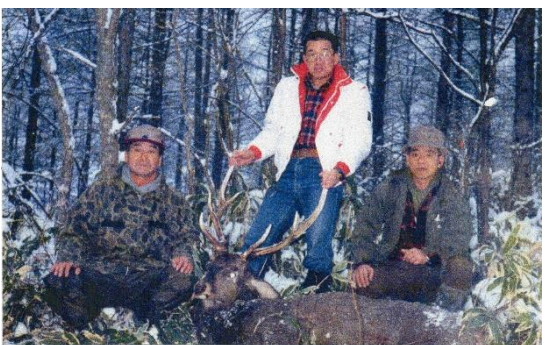
「いたゾ、いた!!」肋を鮮血に染めた見事な牡鹿が、巨体を雪の上に横たえていた。

「立派な角だ。大きさから十歳くらいかア」

「そうなア、百キ以上あるベエ」

Aさんが叫ぶ、「カメラ持ってきたワ。隊長さん、記念写真撮るべ。名人も一緒。はいポーズだ、ポーズ。角をこう持って・・・」

「いくぞー・・・暗いからフラッシュでもう一枚。はいッ・・・」Aさんのにぎやかなこと。華麗な刀掛けの様な角をもった獲物との記念写真が、こうして出来上がった。



いつまでも騒いでいる訳にいかない。Aさ

んが「じゃー始めるぞ」と宣言し、その場で解体に取り掛かった。内地では信仰に基づき儀式を行うが、北海道ではどうするのだろうか。

Aさんが両手を合わせて一礼し、ナイフで鹿の腹部を切り開き始めた。近くで見守る若い仲間に対し、「これもやらんと上手にならんワ。ホレ、やってみれエ！」

「いやいやうまくいかないべさ。遠慮するワ」
結局AさんとBさんの両ベテランが続けることに。草食動物特有の、一抱えもある緑色の内臓を取り出し、血抜きした。その腹に雪を入れ、体内を洗い、肉を締める。全く手慣れたものである。レンジャー訓練の際、若い学生が鶏をさばくのに四苦八苦している様を思い出した。しかしここでの解体はそこまで。後は帰ってから肉・皮・頭等を処理する。

「北海道の儀礼は簡単だね」というと、「アイヌの伝統を継いでいますから。熊祭りの儀式をテレビで見たいと思いますが」とK三尉。

「アイヌがやっているのをTVで観た」
「あれは、熊の霊を慰めるのではなく、霊が神の所に帰って、数多くの仲間を連れて戻ってくるのを祈っているのですよ」

「ホー、よく知ってるね」
「狩猟講習会で習いました。アイヌは動物も

鮭も人間に食べられることを喜び、恨んだり怒ったりしないと考えています。だから、解体前の儀礼もあっさりト……」

「随分人に都合のいい解釈だね」と私。
獲物が豊富なせいか、仏教の影響か、ところ変われば慣習も変わるということだ。

「しかしこれからが大変です。この獲物を車の位置まで運ぶのが……。シートに包んで、応急且過の要領で道まで運び上げます」

質問ばかりで特技のない私としては、それに積極的に参加するしかない。車までの道すがら、仲間同士の狩猟談議が続いていた。

「T曹長さん、今シーズンも快調だワ」
「あの距離じゃー当たりっこないわ。悔しいけど、実力じゃかなわんワ」

T曹長は若手グループに「見出し・リード」について指導している様子だった。

遠くで「ドーン」という音がこだました。
「××方向だべ。ハンター入っとる」「今日は鹿が動いてるな。本格的にやるべ」

素人の私が、「流れ弾大丈夫かな？」
「なーんもだ。阿寒は広いんだ」
「話おかしくないかい？ 自衛隊の弾より薬量少ないから、届きっこないべさ……」

⑦ 待望の「巻き狩り」―失敗の巻

車に到着して「一休み」と思っていたら、直ちに次の狩場へ移動開始。

「時間と天候とハンターの行動に応じ、鹿が動きますから」とK三尉。車両移動中は全員が四周を警戒し、トランシーバーでの情報交換が続いている。

当時(1980年代後半)の狩猟は銃・車・通信機・防寒具等ハイテク化されていたが、スノーモービルは音が大きく敬遠された。食料はやはり「餅・大福」が最高だとか。

新たな狩場に到着し、地形判断したAさんが、「曹長さん、ここは『おろし巻き』だワ。したけど今日のメンバーでは簡単にかん」
「Aさん、ミーティングやるツ。全員集合」
私がK三尉に質問。『おろし巻き』って何？

「鹿を山の稜線から沢に追い落とすことです。人数が十一人ですから、山を取り囲むことはできません。鹿の習性を利用して逃走経路で待ち構え、ドーンとやります・・・」

「逃走経路って、分かるの？」
「鹿が沢に水を飲みに来る経路は決まっています、大体わかりますね。経験と勘で」

「なるほど。接近経路か・・・」
「そうです。だからミーティングで鹿を追い

出す『勢子』と、待ち伏せて撃つ『待ち』の組に分けます。そして、その場所、追い出し方法、合図を決めます」

「T曹長がリーダーになるの？」
「リーダーはAさんです。『共猟』の場合、リーダーが絶対で各組を統制します。リーダーは実績と経験で自然に決まりますネ」

「ミーティングの雰囲気は、部隊の訓練と随分違うね。近寄りたくない雰囲気だね」
「真剣ですよ、みんな・・・」

更にK三尉の説明が続く。「リーダーとして一番難しいのは、『待ち』の人選と、『勢子』の巻く経路の選定です。射撃のうまいものを『待ち』にしますが、上級者と中級者、ライフルと散弾銃の組み合わせが必要です。経路選定も間違うと、全然出会いません・・・」

なるほど、小隊長の陣地防御の編成要領と同じだ。五分くらいのミーティングは、時刻規制を行って終了し、グループ行動に移った。
T曹長が私に近づき、『勢子』に付きますか『待ち』に付きますか?』と聞いてきた。

寒い中でじーっと待つのは性に合わない。
『勢子』に付いて、猟犬の分踏ん張るよ」
「わかりました。私とK三尉と一緒に行動してください。途中でへばらないよう・・・」

山裾を巻いて迂回した後、沢伝いを稜線目

指し、交代でラッセルを始めた。私とえば、

昨夜のアルコールを「担架搬送」に続いて絞り出すことになった。冬季訓練や山岳救助訓

練では、積雪・植生・勾配を考慮して楽なコースを選べるが、「勢子」は鹿の習性・風の方

向を加味し、稜線を目指さねばならない。

稜線に出た。「ではいきますか」と言って一発射撃した。「逃げてしまわない?」

「勢子弾といって、鹿を牽制するため、時々射撃します。夜行性のシカは、昼間森の中に潜んでいます。音には敏感で、休息中も目と耳は働かせています」

「連隊長、右の森を確認してください」

T曹長の指示で、獲物の確認に出かける。

お客扱いで勢子に加えてもらったが、猟犬の代わりにはなれない。

ところが「オッあった。足跡発見!」

T曹長が近づき「新しいですね。少し前に通ったばかりです」

「どうしてわかる?」

「足跡の雪の塊具合と、新雪状況です。フンがあれば確実にわかりますが・・・」

トランシーバーで逐次状況を報告している。時折、梢からどさつと雪が落ち、「鹿か」とド

キツとさせられる。

すかさず私が、「目の前の藪から、熊が出るってことはないだろうなア」。矢臼別演習場に先日「熊出没」情報が出ていた」

「阿寒にもいますよ。この雪です。里に下りたか、冬眠でしょう。ライフルありますから、何とかあります」T曹長の言うことだし、命を託しているわけで、狩猟犬の役割の大きさを改めて認識させられた。

注意深く針葉樹の茂みをチェックし、足跡を探して徐々に山を下る。「勢子」でも、機会があれば射撃するので、T曹長も射撃姿勢をとっている。しかしこんなに深い森では、散弾の方が効果的ではないかと思った。

沢に近づいた時、T曹長が手信号を送ってきた。「足跡発見」「左前方に下がっている」との身振りだ。三人が横に展開する。

突然、前方の茂みから黒い影が飛び出し、沢の方に下って行った。射撃はできないが、「そつちへ行った」と緊急報告。

一呼吸おいて沢の方から「パーン」「ドーン」と散弾とライフルの音。

「やったか?」興味津々で足が早まる。

「一人で飛び出すと間違って撃たれますッ」「シマッタ」と思い、揃って沢に下った。

11 沢で射撃した「待ち」は、

「イヤー曹長さん、ダメだワ、方向まちがったもんな。射撃距離もチョット・・・」

「鹿におちよくられたか。いやいや参った」

「鹿も必死だもなア・・・」

他の勢子グループも到着し、ミーティングで反

省会が始まった。

「駄目だアー。俺ッ、傷ついた・・・」

『「待ち」』は、腕の差ありすぎるんだア」

「俺二度と『待ち』はやらんワ」

「Aさん、今度やり方変えてよッ」

『「待ち」』はやり直しだなッ。最初から

「それがわかりヤーええよ」とAさん。

「腕はいいが、発見と射距離の関係がいま

いちだったのだろう」とT曹長が慰めた。

失敗した「巻狩り」も、屈託のない笑いの

中で終了した。

⑧ プロフェッショナルを目指して

この近くの鹿は追い出したので、二

つ三山先の狩場に移る。山の形状、植生

から、今度は「横巻き狩り」になった。

広大な山の斜面を横に巻く―尾根と

並行に麓からも「勢子」が追い、「待ち」

は先の道路等見通しの良いところで、

鹿の横断を狙う。再度、尾根沿いの「勢

子」に加わったが、今度は同好会のD君が散弾銃で加わり、四人となった。

所定の位置に付くまでの間、様子も

わかってきたのでD君に「鹿撃ち」の民

間訓練について問うてみた。

「射撃の訓練はどこでやるの？」

「店の射場でやってます」との答え。すかさ

ずK三尉が補足してくれた。

「銃砲店の社長が郊外に五十坪の射場を持っ

ているんです」

「射撃協会とかでなくて個人がか？」

「そうです。北海道ならですが、私も時々

使わせてもらいます」

「自衛隊のバイアスロンチームに貸してもら

えないの？」

「警察の許可条件に軍用銃は入ってません」

「ダメか…では、一日にどれくらい撃つの？」

D君が、「解禁が近づくと真剣になります。

まあ、月平均二〜三回くらいってところかな。

一回で三十〜四十発。一発四百円くらい。締

めて一日一万〜二万円ととこ。パチンコより

安いワ」

「夏場のトレーニングはどうしてる？」

「射撃協会もやつから、散弾銃とライフル。

移動目標もやるよ。社長から賞品も出るワ」

「優勝はいつもT曹長じゃないの？」

「曹長さんは別格だア。薬莖・火薬・雷管・

弾頭を別々に買って自分で調合するもんな。

オリンピック選手並みだワ。酒もやらんし、

自衛隊で鍛えとる。勝って当たり前だ」

T曹長かすかさず、「お前も少し練習に力入れ

ろ。練習さぼって本番だけ張り切っとる」

D君が反撃する。「したけど散弾で練習しても

あと三年でライフルだし、散弾の練習はあま

り意味がないワ。結局、ライフルで一からや

り直しだもんな・・・」

K三尉が「しかしその腕じゃ、『忍び』はでき

んぞ」とたしなめる。私が、『忍び』って何

だ？」と質問した。

D君が「夜這いみたいなものだナ。一人で山

に入って鹿に忍び寄って『ドーン』とやる。

獲物独り占めできるが、効率悪い。隊長さん、

『忍び』はK三尉のおハコですよ」

「それで今日、彼が銃を持ってこなかった理

由が分かったよ。」

すかさず隣にいたK三尉が、「今回は『共猟』

ですから、チームワークを重視して、遠慮し

ました」と抗議した。

「D君、一シーズン何回鹿撃ちに行く？」

「毎日行っても六十回、週一〜二回として十

から十五回。雪や天候で狩りにならん時もあるし、

なんぼ頑張っても十回くらいでないの。

リーダーのAさんは別格だワ」

K三尉が「好きな人は、正月に集中してやっ

てます」と補足した。

「元日から殺生か？」と言うと、

「したけど、民間はそろって休めない。仕留

めたときの気持ちは何とも言えんワ」

「山歩きも慣れているね。装備の脱落防止も

決まっているね？」

「イヤー、曹長さんの教育のおかげです」

ラッセル、射撃位置の選定、地図の見方も

自衛隊式で決まっている。結局、今回の「横

巻」では、「待ち」が一頭を散弾銃で仕留める

成果を上げた。

尾根の「勢子」が到着し、今度は反省会の

ミーティングが、戦勝会に早変わり。

「いやー、一度やったら病みつきになる。

この気分最高!!。どうだ、見直したかい」

先ほどしくじった若者が、「五十がなら、俺

だってやれるわさ」と混ぜっ返す。

「したっけ、さっきは逃がしたもなア」

「実力の違いだべ」

「運もあるさ」「運も実力だワ」

13

眷狩り―それは富士の裾野の者とはかなり違うが、自衛隊の訓練の「ゲリラ搜索」「潜入偵察行動」と共通部分もある。旗、指し物、太鼓、ほら貝等はないが、連係プレーが要求される狩猟方法だった。

⑨ 獲物の分け前は、どうする？

昼はとつくに過ぎていたが、昼食も摂らず、天候と鹿の習性に合わせて行動した。風も強まり、気温もだいぶ下がってきた。

「シバレてきたワ」「タバコ吸うか?」「あああるよ」「火、向こうから見られんように」メンバーの行動は、常に鹿を意識している。早朝から彼らと付き合ってきたが、狩りを中心に合理的で、小気味よく感じられた。その後、「待ち」の役割を交代し、「おろし巻き」を行ったが、新人錬成の感が強く、成果は挙げられなかった。

四時過ぎ、ガスのために切り上げ、狩猟区域を出ようとしたところ、Aさんの車が曲がり角で二頭の鹿と鉢合わせ。復路であり警戒を緩めていた矢先だったが、素早い行動で散弾を発射し、見事一頭を仕留めた。もう一頭に逃げられたのは、突然で目標配分ができなかったためとT曹長が解説した。

その後、林野庁の見回り職員に出会ったが、彼らとは既に顔なじみと見えた。車の窓を開けて職員は、「どうかね?」と聞く。Aさんは車を降りて、「まずはまずだ」と獲物のシートを剥がし、角があるオス鹿であることを確認させた。メス鹿は受胎しており、獲ってはならない規則になっている。「雪道、気いつけて下ってや」と言い残し、車で去った。

結局、当日の朝七時から夕方四時まで頑張り、三頭を仕留めた。さてさて、凡人の気がかりは、それをどう処分するかである。

「撃った鹿、どうするの?」との質問に対し、T曹長はAさんに、「今日は、どうする?」「Aさんは「三〜四人に一頭ならちようどでないかい。隊長さん、とても一人じゃ喰い切れんワ。冷凍庫のおっきいの持つてる?」。

私が、「単身赴任だから、ないない。鹿肉はいいよ。角や皮はどう分けるの?」

「欲しい人にくれてやるさ。剥製にするのも金掛るから・・・飾りにするならやつちゃう。そうだ、曹長さんの獲ったでっかいの、隊長さんにやるべエ」

「そうだ、そうだ。それに決まり」と若い人たちが騒ぎ出した。

「えー、待てよ、待てよ。遅刻した見学者

にもらう権利はないわ」と私。

「権利なんて、なーんもないワ・・・」

百頭以上も仕留めた人や、毎週出かける人には、「鹿撃ち」の快感以外の利得は薄れているのだろうか？ 緊張感が解け・仲間同士がトランシーバーで自慢話や失敗談に花を咲かせている。「隊長さん、今度「熊撃ち」に連れてっから、楽しみにしてエ」

「おいおい、十勝に『熊撃ち』ってあるの？」

「鹿撃ちの様な正式なものはありません。隊長、担がれていますよ。冗談ですから」と、

K三尉が注意してくれた。

「倉本聰が、ここらの熊は気立てが良い言っ
て書いているけど、本当か？」

「えッ・・・それは富良野の熊だべ」

「今度は犬、必ず連れて行くから・・・」

「ハッハッハッ。隊長さん、頑張ったワ」

彼等の射撃の腕と名誉をかけ、更にカネと時間と労力をつぎ込んだ成果―三頭のエゾシカ―が風に煽られたシートから、よきつと足を出している。阿寒からの帰途、街を通るたび現実の生活に引き戻される感じがした。

疲れと緊張からの解放。そして何よりも充実感。帯広の町が近づいた頃は、既に夜も更けて気温もぐっと下がっていた。

おわりに

念願の「鹿狩り」に同行した所見は、予想以上に小部隊の実戦的・疑似的な体験ができたという満足感だった。

当時、日米共同積雪地実働訓練の際、米側参加部隊に対する所見で、彼らの躡や指揮官動作について、賞賛の声が高かった。

「装備品を常時携行し、軽易にビバークし、個人装備火器を身から離さず、演習場で特定の食事時間を設けず、常時敵との接触保持を心掛けている」、「小部隊指揮官のリーダーシップも素晴らしく、彼らは自信に満ち、未熟地で無声指揮を行う」と評価していた。

だがそうした指摘は、今回の鹿狩りで民間の若者達が実践し、成果を上げていた。

現代、転属の多い自衛官が狩猟をするには、多くの規制により難しいようだ。だが、法律・規制を緩め、時間と機会を与えれば、青年たちは郷土を守るために立ち上がってくれそうだと実感した次第である。

貴重な体験をさせていただいたK三尉(前掲写真左の児玉三尉)、T曹長(前掲写真右の田中曹長)、帯広狩猟同好会の皆様、ありがとうございました。おわり

2022/01/05 記